

2015. 10. 22 (木)

「信じるということ」のパラドックス

清水 裕 士

信じることは、疑うことも同時に意味する

ここで話すのは初めてなので緊張していますが、今回「信じるということ」というお題をいただきました。私は心理学者なので心理学的なお話でもしようかと思い、いろいろ考えました。そして、その「信じるということ」についていろいろ考えていくと、結構、不思議なことがあるなというふうに思ったわけです。

どのようなことかというところ、「信じるということ」というのはある種、逆説的 (Paradoxical) な意味を持っているのではないかと思ったわけです。例えば、小学生など小さい子とかに「サンタさん信じているの？」というふうに言うというのは、皆さんは、どうでしょう。「えっ、そんなこと言うの？」ともしかしたら思うかもしれませんが、それは「サンタさんはいないけれども、それを信じているの？」と言っているように聞こえますね。また、例えば皆さんのご家族とかが「私はあなたのことを信じているよ」といきなり言うてきたら、「えっ、何か私は疑われるようなことをしたの？」と、もしかしたら思うかもしれません。

信じる行為というのは、実は「それ自体を

疑っているわけではないが、きっと正しいのだろう」というふうな、ある種の選択を行っている行為のようにも思えるわけです。「信じる」と聞くとある種の安心感を得られると同時に、「信じる」ことは結構勇気が要る行為のようにも思えます。それを心理学的な知見も紹介しながら話をしようと思います。

安心的信頼と一般的信頼

心理学では、信頼 (トラスト) の研究が今から20年くらい前に、日本で流行りました。山岸先生という、元北海道大学の、今は一橋大にいらっしゃる先生が研究を進めました。どのような研究かというところ、いわゆる伝統的村社会とアメリカ的都市社会の人たちが持つ、人に対する信頼の形が違うということを明らかにしたのです。皆さんの出身はどこか分かりませんが、今は伝統的村社会というのはかなり限定的でありませんが、例えば鍵が閉まっていないような家におばあちゃんが住んでいる所も、もしかしたらあるかもしれません。田舎のほうでは鍵を閉めないというような話は、聞いたことはあると思います。それはなぜかというところ、泥棒などが来るということはそもそも考えていないわけです。仮に来たとしてもすぐにばれるの

で、そのようなことをするバカな人はいないと思っっているわけです。

アメリカなどの西洋的な社会では、一個一個の部屋に鍵が付いて個室になっていて、ふすまというものもありません。すると「もしかしたらアメリカ人とかのほうの人が信頼していないのではないか」と思うかもしれませんが、実は、アメリカ人は、また違う信頼を持っています。それを「一般的信頼」といい、会ったことがない人に対してもまずは信じてみるというような信頼を持っています。

僕はアメリカに住んだことはありませんが、オーストラリアにちょっと滞在した時があります。行ったばかりの頃に、ミーティングの後にバーに行きました。みんながワイワイしゃべっていたので「みんな友達なのだな」と思ってしゃべっていましたが、お酒も飲んで「じゃ、帰ろうか」という時に「君、名前何なの？」と言うわけです。「こいつらは名前も誰かも知らないのに、あんなに盛り上がりがあったのか」と僕はちょっとびっくりしました。日本では酒を飲んでいればそのようなこともあるかもしれませんが、何も知らない人がいろいろ話をできるというふうな、人に対する信頼の置き方——そのように考えると、では日本の村社会はどのような信頼を持っていたのかというと、よく知っている人に対しては安心していきます。村社会では人が少ないので、みんなのことをよく知っています。外の人は来ないし、よく知っている人たちはそのようなひどいことはしないよねというふうに、ある種、安心していう状態です。

僕がいたオーストラリアでは、よく知らない人に対しても結構ポジティブにコミュニケーションを取って友達をつくるというふうなことがあります。先ほどの話とどのような

なかりがあるかということ、信じているということ自体が、ある種、安心していう部分と、疑いながら、そうではないかもしれませんが、取りあえず信じてみるという2つの側面があるのではないかということ、それは先ほど言った信頼の研究とも結構関連するのかなというふうに思ったわけです。

だいたいその信頼の研究の枠組みでは、いわゆる日本の村社会というのは、よそ者に対しては冷たいというような主張が多くされています。よそ者という言葉自体が結構、日本特有の言葉かもしれません。知らない人、自分たちの身内ではない人、よそ者は信用できないというような言い方があるように、よそ者に対しては信頼しません。すなわち、信頼できる人とできない人を分けるような形の信じ方をするという形です。これを安心的な信頼と呼びます。

では、もう一つの信頼である一般的信頼は、すなわち、信じるかどうかは分からないが、まず信じてみて、その後どうするかということを考えてみようというスタイルです。

面白い心理学の実験結果があります。「会ったこともない人を信頼するのは、お人よしなのではないか」と、もしかしたら思うかもしれませんが、実はそうではなくて、一般的な信頼を持っている人というのは、初めはとりあえず信頼するのです。囚人のジレンマゲームというものを使うのですが、それはまた社会心理の授業をとってもらえば勉強できると思います。相手が裏切ってお金を搾取しようするとき、その搾取される前に、相手が信頼できるかどうかをすぐに見極める力を持っているというようなことが実は分かっています。まずは信じるのですが「この人は駄目だろう」と思ったらすぐに関係を変えるので

す。

それに対して、村社会的な信頼を持っている人というのは、一回「この人は大丈夫」と思ったら裏切られても搾取され続けるのです。もちろん、ずっとバカみたいに搾取されるわけではありませんが、一回「この人は大丈夫」と思ってしまえば、ちょっと柔軟さに欠けるというような結果が出ています。

信じることはあなたを自由にする

そこからどのようなことが言えるのかというと、きょう読んでいただいた「真理はあなたたちを自由にする」というところです。あそこに掛かっていますね、社会学部のモットーのようなフレーズとして掲げられています。これと全く同じ話をしないですけれども、きょうお話しする一つのメッセージとして「信じる力が皆さんを自由にする」というようなことがあるのではないかと思います。真理とは何かよく分かりませんが、信じる力、そのようなものが人を自由にするのではないかと思います。何となく今までの話で分かるかもしれませんが、会ったこともない人を信じるということは、人間関係を結構広げていく力を持っているわけです。

実際にそれはデータとしてもありまして、ソーシャルネットワークが広くなるという結果も出ています。いわゆる「信じる」ということの意味合いには多分幾つかあって、われわれが思っているそのニュアンスというものもいろいろごちゃごちゃするわけです。

例えば、漫画とかによく出てくるマッドサイエンティストみたいなものを思ってもらえばいいのですが、盲目的に科学を信じている人というのは、何か不自由さを感じる側面も

あるような気がします。すごく視野が狭く信じるタイプというのは何か不自由さを感じるなと思う一方で、先ほど言ったように、誰でも取りあえず信じてみようというものは自由で、大きな違いがあるのではないかと思います。

これをもう少し整理してみますと、例えば、誰かが言ったことや何かを読んだということ、取りあえず批判なく盲信して「ああ、そうだ。これが正しいんだ」というふうに思ってしまいます。これは結構、学部2年生の大病みみたいな感じで出てくるかもしれませんが、「これが僕の求めていたものだ」という本に出会うのはそれはそれでハッピーなのですが、そのようなことがあると、ガツと狭くなってしまうということが起こり得ます。そうすると「これが正しいから他の言っていることは間違いに違いない」となります。心理学者が陥るそのようなものというのは、統計学を使い、データを使って客観性があるとか統計的検定によって物事を明らかにしたりするわけですが、社会学だと例えば質的な研究とか社会調査なのですが、きっとそのようなある種のサイエンスみたいなものが真実で、あまりデータを使わないような学問分野に対しては「いやいや、そんなのは」みたいな立場をとってしまうことがあったりするわけです。

今までの話からも分かるように、盲信する、あるいは別の言い方をすると「これで大丈夫なんだ」というある種の安心みたいなものにどっぷりつかるといのは、ちょっと不自由な感じがします。例えばこのようにデータを使う研究がある一方で、データを使わないような研究もありますし、文献だけで進めていく研究もあります。それはもちろん、い

ろいろな方法論でのメリットがあるわけですが、「ああ、そうか、それはそれで説得力があるな」というようなこともあって「これが本当に正しいかどうかよく分からないけど、取りあえず信じてみよう」というふうな立場で学問あるいは人に向かい合うと、結構フットワークが軽くなり自由になっていきます。いろいろな人と対話ができるようになります。社会学部には何人先生がいるでしょう。40人は超える先生、ゼミは少なくとも40ぐらいはあるわけです。ここにいる人はだいたい1回生の人が多く来年からゼミを選ぶと思います。その時に例えば心理学をやるとすると、心理学のデータを使いますが、狭い視野で「これがきっと正しいのだ」「自分はこれだけ勉強していれば大丈夫だ」と思うのは、ちょっともったいないというか、不自由な感じがするわけです。

ですから、社会学部の先生は業績を積んで研究をしているすごい先生方ですから、何かしら、そこに真理というか、トラストがあるはずで、それを一回信じて授業を受けてみてください。自分には関係ない授業だから適当に聞いておこうとか、必修だから取りあえずとってみるか、みたいなことではなくて、一回ちょっと真に受けてみるということも大事なのかなと思います。

信じるためには、一度ハマってみる

「信じる力が自由になる」というような話を考えるときに、一体どうのようにしたら信じる力を身につけられるのか。実は信じるということはすごく大変です。なぜなら、間違えているかもしれないものを正しいと思うからです。例えば、1回浮気した恋人を信じ

る、これはなかなか難しいものがあり、もう信じられないという感じになってしまうと思います。違うかもしれない、また裏切られるかもしれないという人を信じるというのは、なかなか大変です。違うかもしれないようなものを信じるということは、実は、すごい力と勇気が要るだろうと思います。これだけ正しいと思っていれぱすごく安心するし、これだけ勉強していればいいのだというふうに思うわけですが、それは楽ですよ。

そのような信じる力を養うということは、実はなかなか身に付かない、結構大変なことだろうと思います。皆さんは、1回生の人が多いというつもりで今話していますが、今「信じる力が自由になる」と言いましたが、まずは取りあえず、一個のことを盲信してみるのも、それはそれでいいのかなという気はしています。「何を言っているんだ、さっき言っていたことと違うではないか」と思うかもしれませんが、ここで言っているのは盲信でなく、一度「はまってみる」ということです。はまってみて、一回深くまでいってみようということです。一個の学問を取りあえず選びます。それはなんらかの側面からは間違えているかもしれませんが、でも一個選んでみて、せいぜい学部で勉強できるレベルですから2~3年ぐらいはやりながら、まずそこを信じてずっとやってみます。他のこともいろいろあるのですが、フットワークはできれば軽い状態を維持しながら、一回深くいってそれでまた戻ってみるみたいなことをやってみると、他の学問の深みが見えてきます。「このようなことだから、このようなことを言っているんだな」ということが見えてきて、よりいろいろなものを信じることができます。要は、一度物事にはまることで、他のものの

良さが見えてくるので、信じることができるのではないかなというふうに思います。

最後に、一応、「真理はあなたを自由にする」というメッセージ、あるいはこの聖書の箇所のメッセージは僕には深くは分かりませんが、少なくとも信じる力、自由な意味での信じる力というのは、少なくとも、勉強、学問においては、皆さんを真理に近付けるようなものになるのではないかと思います。どっぷりはまる、そして、初めて会うものに対しても「ああ、なるほど。そうか」「それで何が面白いかな」というふうなスタンスで、この2つをうまく使って進めていってもらえばいいと思います。僕自身も大学院時代は結構盲信してしまっていて「この理論が正しい」とかと思って、マスターを出る時に、そのようにもがいた経験があります。もがいたのは、

それはそれで良かったかなというふうに思ったりもします。皆さんの中では大学院に進む人はそれほど多くはないと思いますが、もがき苦しもう、とまでとは言いませんが、いろいろなものがあって、いろいろなものが結構それなりに正しいことをやっているのだというふうなつもりで、一回信じて、はまってみてほしいなと思います。2回生ぐらいになってくると、「正しいものなんか何も無いね」みたいな、ある種のニヒリズムに陥りがちかもしれませんが、今生き残っている学問や理論は何かしら正しいです。そしてやっぱり、何かしら間違えていますから、そのようなスタンスで勉強してもらえばいいかなと思います。私からの話は、以上です。ありがとうございました。

(社会学部准教授)